

金田地区

① 寺田縄のお屋敷跡

MAP F-4

室町時代末期、秩父の豪族畠山氏の十三代目畠山定重は、扇谷上杉氏に仕え、寺田縄に居住していたといわれます。その後、小田原北条氏の家臣である布施佐渡守康能がこの地を領し、居館を構えました。このことが「お屋敷」と呼ばれる由来と考えられています。

「お屋敷」の広さはほぼ三町歩で周囲に堀を巡らし、邸内にはお屋敷山と呼ばれる築山までありました。現在、その形跡を見ることはできませんが、堀跡の一部は水田や蓮田として利用されていました。

また日蓮宗蓮昭寺は、布施佐渡守康能により屋敷内の乾(北西)の方向に再興された寺と伝えられ、同寺には康能をまつる墓所もあります。

② 飯島堰(金目川堰)

MAP E-4

金目川の流れるこの地域は水田が広く開け稲作農業の盛んな所で、ここ飯島付近には、昔から農業用水を取水するための堰が設けられていました。



飯島堰は、農業増産対策のため建設され、昭和29年(1954)3月に完成しました。これにより、両岸にあった4か所と下流部の5か所の堰は一つに統合されました。

取水口は金目川の左岸部に設けられています。金目川左岸域へはここから3本の水路をもって、また右岸へもサイフォン構造によって川底に水路を一本渡し、送水されています。

この堰の完成により、金目川からの取水は以前より安定し、地域にとって最も重要な堰となっています。

③ 福田寺の絵画 市

MAP F-5

紙本墨画淡彩 十六羅漢図 市

十六羅漢とは、仏の正しい教えを守ることを誓った十六人の尊者です。本図は山林で修行する羅漢を、各幅に八人ずつ人物や鳥獣などと組み合わせて描いています。

彩色は羅漢の顔に代赭(赤色)と胡粉(白色)を施し、唇には朱を入れてあるものの、他は墨のみで描かれています。



【桂山】及び【東川斎之印】の印章があることから、作者は東川斎桂山藤原美信で、制作された年代は天保年間(1830～1844)と推定されます。

紙本着色 十王図 市

冥土には十人の王(十王)がいて、死者は各王のもとで生前の罪業を裁かれるといわれます。本図は、この十王を五王ずつ各幅の上部に並べ、その下に地獄の様子を描いています。さらに、十王の上には各々の本地仏が描かれています。彩色は、墨調を生かしながら、主に藍、代赭、胡粉を要所に差した淡泊なものです。落款や印章はないものの、優れた描法と人物の顔貌表現などから、作者は「十六羅漢図」と同じ藤原美信と考えられます。福田寺には藤原美信の作品として、他に板絵の「高士図」が2面あります。

豊田・城島地区

① 村井弦斎の墓

MAP H-4

村井弦斎は文久3年(1863)に現在の愛知県豊橋市に生まれました。東京外国語学校に学んだ後、米国へ留学。帰国後は「報知新聞」の記者となりました。明治36年(1903年)正月から1年間、報知新聞に小説「食道楽」を連載し、これは後に出版され、10万部という破格のベストセラーになりました。



明治37年、弦斎は旧平塚町東浜岳(現在の平塚市八重咲町・松風町)に1万6千余坪の土地を購入し、屋敷を構えました。邸内には、花草園、果樹園、温室、畜舎を設け、アスパラガスやアーティチョークを栽培するなど、食材作りの段階から「食道楽」の世界を実践しました。

食文化の向上と大衆小説の発展に寄与した弦斎は、昭和2年(1927)7月、平塚の自宅で64年の生涯を閉じました。村井家の墓には、弦斎のほか妻・多嘉子や女性登山家として生涯を自然保護にささげた長女・米子などの家族も眠っています。

② 平等寺の木造薬師如来坐像 市

MAP G-4

『吾妻鏡』によれば、平等寺は建久3年(1192)8月、源頼朝が妻政子の安産を祈願させた相模国の古刹の一つです。明治末年の火災で本尊が消失したため、以後境内の薬師堂(消失)に安置されていたこの像が、当寺の本尊として祀られるようになりました。



左手に薬壺をもつ施無畏・与願印を結ぶ像で、低めの頭髪、服制、衣文表現などに宋元風の特徴がみられる一方、張りの強い顔やどっしりとした体軀などに運慶風の特徴が認められます。彫技も柔軟さを保ち布の質感もよく表現されていることから、制作年代は14世紀、南北朝時代と考えられます。胎内背面には、寛永8年(1631)の修理墨書銘が記されています。2種の作風を巧みに融合した東国的な作品であり、平塚市内では屈指の中世彫刻として貴重な存在といえます。

③ 大庭塚の跡

MAP G-4

桓武平氏の流れをくむ大庭景宗の次男・景俊が、平安時代の終わりがち豊田本郷付近に館を構え、豊田を姓としました。文治4年(1188)、豊田にあった景宗の墓が盗賊の墓荒らしに遭い、副葬品を盗み取られたと『吾妻鏡』に記録されています。この墓は大庭塚として、わずかな五輪塔などが痕跡をとどめています。



④ 正福寺の文化財 県市

MAP H-2

庚申塔 県

60日に1回の庚申の夜に眠ると、寿命が縮まるという民間信仰がありました。そこで徹夜で語り合っ酒食を共にする庚申講が盛んに開かれていました。その信仰に基づいて建てられたのが庚申塔です。

正福寺(大島813)にある明暦2年(1656)の庚申塔は、青面金剛と2匹の猿を表現し、市内で最も古い庚申塔として、県の重要文化財に指定されています。



(塔身正面)

相州大島郷為寒念仏供養奉造立為浮図一基者也
明暦二年丙申霜月吉日

木造薬師如来立像 市

正福寺境内の薬師堂に安置されています。左手に薬壺を持つ施無畏・与願印を結ぶ像で、厨子の外に前立像の形で祀られています。この像が本来の本尊であったと考えられます。小粒の螺髪、穏やかな表情、浅めの衣文の刻み方などは、平安後期に流行した和様の特色を示し、両袖や背面の皺の表現にもよく神経がゆきとどいています。台座や肉髻珠、白毫、右手などは後補ですが、平塚市内に遺る仏像の中では、早期の一例として重要な作品です。



木造十二神将立像 市

薬師如来立像の眷属として祀られています。各像とも鎧を着用し、頭上に十二支の標識をつけ、後補の岩座の上に立っています。像は誇張が少なく顔の写実も的確で、全てが同時期の制作とは断定できませんが、14世紀後半の作と推定されます。

それぞれの姿勢を変えて巧みにまとめた群像であるうえ、中国道教神を仏教化した加藍神を連想させる辰神将像や、十王によく似た頭部をもつ申神将像は、この時期の作品としては珍しく、貴重な存在といえます。